

研究ノート：

菊池「蘭学事始」のカタカナ語若干

北 岡 一 道

(2010年1月30日受理)

1. はじめに

江戸期の解剖学翻訳書「解体新書」、〈巻ノ一〉第1ページのはじめに、翻訳者4名の名がある。そこは〈日本 若狭藩 杉田玄白、同藩 中川淳庵 云々〉と続く。玄白は後年この翻訳事情を中心にえがく「蘭学事始」をあらわす。これについて解説書などは複数あるが、菊池寛の「蘭学事始」は同書を基礎資料とした歴史小説である。この研究ノートは、作品中のカタカナ語（外来語としての日本語、外国語の一時的なカタカナ表記）若干に、すこし補注したものである。

2. 構成

菊池寛の「蘭学事始」は8章からなっており、時間順序をふつうにおった語り物の形式である。www.aozora.gr.jp/cards/000083/files/497_19867.htmlしかし、その8章は、それぞれの長さにバラツキがあり、いくつかの章は、自然に話の展開にそって2、3章で内容、文体がまとまっている。つまり、（以下のカッコ内の数字は、比較のみじかい章を（1）としたときの、他章のおおざっぱな長さをあらわす。）

〈1章〉（5）医師、杉田玄白と前野良沢がオランダ語通訳者、西善三郎にあう。玄白のオランダ語学習の可能性についての問いに、西は否定的。良沢は肯定的。

〈2章〉（1）フワケ前。杉田玄白が「ターヘル

アナトミア」原書を手にいれる。

〈3章〉（2）玄白らに、フワケ（腑分；死体解剖）の参観の予定がはいる。

〈4章〉（2）玄白、良沢が同判の「ターヘルアナトミア」を所持することがわかる。

〈5章〉（2）フワケ後。玄白、良沢らフワケ（腑分）にたちあい、原書和訳を決める。

〈6章〉（2）翻訳作業に苦心する。

〈7章〉（1）翻訳出版。翻訳に関して玄白と良沢は意見がちがう。

〈8章〉（1）翻訳（一応？）完成、出版。良沢、名前をださず。

3. ボルトガル語

この、長めの第1章で、比較的、はじめの方にてくるカタカナ語が2つあり、〈カビタン〉と〈オランダ（という名称）〉である。例は、

〈1〉 長崎表での蘭館への出入（でいり）は、常法があつて、かなり厳しく取り締られていたが、〈カビタン〉が江戸に逗留中の旅館であるこの長崎屋への出入は、しばらくの間のこととて、自然何の構（かまえ）もなき姿であつた。

〈2〉 従つて、〈オランダ〉流の医術、本草（ほんぞう）、物産、究理の学問に志ある者を初め、好事（こうず）の旗本富商の輩（はい）までが、

毎日のように押しかけていた。

これらの例は、それぞれ<カピタン>、<オランダ>という言葉では、この作品のはじめにでてくるもので、しかも、作品全体のカタカナ語(群)としてもはじめである。(例として指摘するカタカナ語がわかりやすいように、カッコ<>にに入れてしめた。以下例文中、本文中も同様。) <カピタン>が1番目、<オランダ>が2番目。

しかし、現在の日本語の<外来語>としては、<カピタン>、<オランダ>という2つの言葉は<ポルトガル語>とされる。(あるいは、語形式、現実的な使用から、<同時にスペイン語>でもある、としてよいだろう。) <キャプテン>、<ホランド>の類例の形で英語にあるものと、基本的に同根、同意であるが、例では<カピタン>は当然、オランダ商館長をさしている。

また、この両語は、状況的に(やや)近接関係にあり、そのしばらくあとの、同一段落で、たがいに近くあらわれている。

<3> そうした一座は、おぼつかない内通辞を通じて、<カピタン>にいろいろな質問をした。それが、たいていは<オランダ>の異風異俗についての、たわいもない愚問であることが多かった。<カピタン>の答によって、それが愚問であることがわかると、皆は腹を抱えて笑った。

<4> 將軍家の、<オランダ>人御覧が昨日滞(とどこお)りなく終わったので、<カピタン>を初め、二人の書記役(<シキリイバ>)、大小の通辞たちも、みなのびのびとした気持ちになっていたので、会談がいつになく賑わった。とうとうおしまい、<カピタン>が珍という珍しい酒を出して、皆を饗応した。

<シキリイバ>は、<スフレイバ>という、英語ではwriter(書く者)相当の語構成をもつオランダ語とみられる。つまりschrijver<-schrijven。

本作品は、オランダ医術(?),オランダ医書が、1つの目的となるものであり、<オランダ>とい

う語と医術、言語といった日本語の近接例はおおい。たとえば、

<5> 彼は<オランダ>文字を読もうという自分のかねてからの宿願を述べて、その志願の可能不可能を、善三郎にただしてみたかったのである。

<6> 玄白の志は、元来<オランダ>流の医術にあった。

<7> 「貴所と某(それがし)とが、期せずして<ターヘルアナトミア>を所持いたしおるなど、これは<オランダ>医術が開くべき吉瑞とも申すべきでござる」

しかし、目的とする、オランダ語(文字)もオランダ医術も、ポルトガルのカタカナ語でよぶざるをえず、オランダ系カタカナ語が、呼称に課せられた歴史的な制約性を示唆しているとおもわれる。

4. <ターヘルアナトミア>という語

日本で「解体新書」の名はふつうによくしられ、その原著も「ターヘルアナトミア」として、よくしられている。(一応。日本の小学生の歴史知識としても基本となっている、とみてよいだろう。)そして、菊池、「蘭学事始」の、みづかな第2章でも、<ターヘルアナトミア>として、くりかえし名指しされている。つまり、この小章から順にみていくと、

<8> 玄白が、蘭書<ターヘルアナトミア>を手にいれたのは、それから五日とは経たない頃だった。

<9> 従って、彼は<ターヘルアナトミア>を、ある内通辞から示されると、彼は驚喜の目を瞳(み)は)らずにはおられなかった。

<10> <ターヘルアナトミア>を自分のものにして、玄白は小躍りして欣んだ。

ところが、＜ターヘルアナトミア＞という語は（一番、期待される）オランダ語の＜原著名＞ではなく、また、一般のオランダ語としても（オランダ語としては）、分析がしにくい。そのため、＜ターヘルアナトミア＞というのが同書の（初期）蘭学者のあいだのとおり名だった。玄白自身が、＜原著名＞をしらなかった、のでは、などといわれることがある。（詳論略）

玄白が、手にしていた蘭書のタイトルは、オランダ語名で＜Ontleedkundige Tafelen（オントレートクンディヘ・ターフェレ；最後のnは黙字）＞である、とされる。直訳は＜解剖学的な図表＞となる。（「解剖図譜」などと適当に訳されたりするが、この言い方が、漢方系の研究書である『本草図譜』（岩崎灌園1830年刊）などと平行的な訳語として、実際は非常に適格であろう。「解剖図譜」という直訳的なよび方は、一般には、まったく広まっていない。

この事情、用語表現について、オランダ系のHPでは、たとえば、つぎのようにいっている。（[http://japanesestudies.arts.kuleuven.be/geschiedenis/index.php/Sugita_Genpaku_\(%E6%9D%89%E7%94%B0%E7%8E%84%E7%99%BD\)](http://japanesestudies.arts.kuleuven.be/geschiedenis/index.php/Sugita_Genpaku_(%E6%9D%89%E7%94%B0%E7%8E%84%E7%99%BD))）

<11> Hij werd bekend met de vertaling van 'Ontleedkundige Tafelen', een Nederlandse anatomische atlas, in samenwerking met onder meer Maeno Ryotaku... en Nakagawa Jun'an... Deze vertaling werd gepubliceerd in 1774 onder de naam 'Kaitai Shinsho (... , Nieuw Boek der Anatomie)' .
（拙訳、以下も；彼は'Ontleedkundige Tafelen'の翻訳でしられる。これはオランダ語の解剖学図表であり、前野良沢と中川淳庵との共働による。この翻訳は1774年「解体新書」（解剖のあたらしい本）の名前で出版される。）

＜ターヘル＞、＜アナトミア＞両語相当の語は、連続してタイトルとしては、同書のなかではみえない。＜ターヘル＞はオランダ語タイトル

＜Ontleedkundige Tafelen（オントレートクンディヘ・ターフェレ）＞の後半の語＜Tafelen（ターフェレ；図表（テーブル）の複数形）＞であろうし、また同書のなかで頻繁にもちいられる。（オランダ語訳正式名称はさらにながい。）もとくテーブル（食卓）＞の意味のごく基本的な語でもある。＜アナトミア＞相当の語は、単独では、たとえば、同書、31ページの＜第1図表＞（Eerste Tafel）の項目で＜anatomia＞の形でみえる。（慶応 本；http://koara-a.lib.keio.ac.jp/rarebook/kaitaishinsho/kaitaishinsho_Dutch/book293.html）オランダ語では、＜解剖学＞というとき、ギリシャ語的語構成をもつ＜anatomia＞系の語と、本来語の語構成による＜Ontleedkundige＞系の語の両方がもちいられる。

同書は、ふつうに蘭書、蘭学の（大きな1つの）源流であるとされるが、実際は＜Ontleedkundige Tafelen（オントレートクンディヘ・ターフェレ）＞は、もとドイツ語の＜原書＞がある。ドイツ人医師クルムスによる＜Anatomische Tabellen＞（解剖学図表）がそれである。だから、＜ターヘルアナトミア＞は、ドイツ語原書の、オランダ語訳からの、さらに重訳ということになる。（すくなくとも＜ターヘルアナトミア＞の翻訳、出版当時は）杉田玄白はこのことをしなかった、という説がある。原書にはほかラテン語訳、フランス語訳などもある。

さきの資料に原書からの翻訳、重訳の事情について、

<12> Het Nederlandse boek 'Ontleedkundige Tafelen' is op haar beurt een vertaling van het Duitse boek 'Anatomische Tabellen', geschreven door een Duitse arts (Johann Adam Kulmus, 1689-1745) en uitgebracht te Danzig in 1722. Het boek werd naast het Nederlands en het Japans, vertaald in onder meer het Latijn en het Frans. De Nederlandse versie

'Ontleedkundige Tafelen (volledige titel: Ontleedkundige Tafelen benevens de daartoe behorende Afbeeldingen en Aanmerkingen;

Amsterdam, 1734), is een vertaling van de Nederlandse arts Gerardus Dichten.

(訳: 'Ontleedkundige Tafelen' (オントレートクンディヘ・ターフェレ) というオランダ語の本は、ドイツ書 'Anatomische Tabellen' からさらに翻訳されたものである。原書はドイツ人医師 (Johann Adam Kulmus、ヨハン・アダム・クルムス、1689-1745) によってあらわれ、1722年ダンツイヒで出版されている。同書はオランダ語版から日本語に重訳、ほかラテン語訳、フランス語訳がある。オランダ語版 'Ontleedkundige Tafelen (正式名称: Ontleedkundige Tafelen benevens de daartoe behorende Afbeeldingen en Aanmerkingen; 1734年アムステルダム出版) はオランダ人医師ヘラルドウス・ディクテンによる翻訳である。)

実際、＜オントレートクンディヘ・ターフェレ＞の扉絵 (3) ページには (オランダ語やドイツ語でなく) ラテン語で原題名 'Anatomische Tabellen' 相当のラテン語＜Tabulae Anatomicae＞ (解剖学的な図表: 複数) のタイトルがみえる。そのしたに、斜格ラテン語形で医学博士クルムスの名 (Io. Ad. Kulmi; Johann Adam Kulmusから。Ioはラテン形異綴り字で頭2文字。) がある。オランダ語訳出版地アムステルダムの語はあるが、オランダ語訳者ディクテンの名はない。

ページをくって右 (5 ページ) にオランダ語のタイトルページには、

＜オランダ語書名 (上記正式名称)＞
＜ヨハン・アダム・クルムス (と肩書き) 原著＞

＜ヘラルドウス・ディクテン (と肩書き) によるオランダ語訳＞

＜アムステルダム、出版社、ラテン数字で1734 (年)＞

とある。黒文字のなかで、朱色印字された原著者名、翻訳者名などははっきりわかるようにかかれている。タイトルもはじめの2語 'ONTLEEDKUNDIGE TAFELEN' (オントレ

ートクンディヘ・ターフェレ) は一番おおきくかかれ、'TAFELEN' は朱書きされている。すぐに (オランダ語がわからなくても) 「タイトルらしい」と、おもわれるほどなので、玄白らがあえて、「ターヘルアナトミア」とよびとおした背景には、特殊な事情があることが、想像される。

5. オランダ語

長め第1章ではまず、カタカナ語として＜カピタン＞と＜オランダ＞のポルトガル語 (からの外来語) がでてきた。ことをうえにみた。続いてすぐに、オランダ語の特殊な語、とくに複合語が近接してあらわれる。

＜13＞また、＜ウェールグラス＞ (晴雨計) や、＜テルモメートル＞ (寒暖計) や、＜ドンドルグラス＞ (震雷験器) などを見せられると、彼らは、子供が珍しい玩具にでも接したように欣んで騒いだ。

このうち2つのカタカナ語はオランダ語の複合語で、複合語としての意味は特殊で、一種のタームをなしている。が、その構形成態素はごく基本的な単語である。

ウェールグラスー＜ウェール＞＜グラス＞ー＜weer＞＜glas＞。

オランダ語＜weer＞は英語＜weather＞に相当。＜glas＞は＜glass＞。

ドンドルグラスー＜ドンドル＞＜グラス＞ー＜donder＞＜glas＞。

オランダ語＜donder＞は英語＜thunder＞に相当。＜glas＞は＜glass＞。

＜テルモメートル＞は、＜thermometer＞であり、おなじ綴りの英語＜thermometer＞に相当する。オランダ語 (本来語) には、分解しにくく、ロマンス系外来語、あるいは、語源的なギリシャ語として、はじめて分解できるとするのが、妥当だろう。

一般語の動詞の例。第1章後半にはいって、杉田玄白が通辞（オランダ語通訳者）の西善三郎にたずねる。（玄白ら初心者が）オランダ語文献の解説ができるようになるだろうか、と。これに西は＜むつかしいから、やめなさい＞とこたえるくんだり。ここに、日本人からみた外国語として典型的な、オランダ語彙の例があらわれる。引用がなくなるが、問題となるカタカナ語の指示的意味、語構成、（オランダ語からみれば）外人である日本人通訳者の意味への接近法がうかがえる。

<14> 例えて申そうなら、彼（か）の国の＜カピタン＞または＜マダロス＞などに、湯水または酒を飲むを何と申すかと、尋ね申すには、最初は手真似にて問うほかはござらぬ。茶碗などを持ち添え、注ぐ真似をいたし、口に付けてこれとは問えば、＜デリンキ＞と教え申す。＜デリンキ＞は、飲むことと承知いたす。ここまでは、子細はござらぬ。なれど、今一足進み申して、上戸と下戸との区別を問おうには、はたと当惑いたし申す。手真似にて問うべき仕方はござらぬ。

<15> ＜オランダ＞の言葉の、むつかしき例（ためし）には、かようなこともござる。＜アーンテレッケン＞と申す言葉がござる。好き嗜むという言葉でござるが、われら、通辞の家に生れ、幼少の折より、この言葉を覚え、幾度となく使い申したが、その言葉の意（こころ）は、一向悟り申さななだところ、年五十に及んで、こんどの道中にてやっと会得いたしてござる。＜アーン＞は、元という意（こころ）でござる。＜テレッケン＞とは、引くという意（こころ）でござる。＜アーンテレッケン＞とは、向うのものを手元へ引きたいと思う意でござる。酒を好むとは、酒を手元へ引きたいという意でござる。故郷を＜アーンテレッケン＞するとは、故郷を手元へ引き寄せたいほど、懐しむという意でござる。かように、一つの言葉にても、むつかしきものにござれば、われらのごとき、幼少よりオランダ人に朝夕親炙（しんしゃ）いたしおる者にても、なかなか会得いたしかねてござる。

問題となる語は＜デリンキ＞と＜アーンテレッケン＞の2語であるが、まず周辺のカタカナ語彙を整理していこう。まず、＜カピタン＞、＜オランダ＞は前出のようにポルトガル語。＜マダロス＞（＜マドロス／matroos＞で水夫の意味。日本語化しているオランダ系の外来語である。

そして＜デリンキ＞は英語＜drink、動詞（のむ）＞に対応するオランダ語＜drinken、動詞（のむ）＞の、とくに不定形であろう。＜drinken、動詞（のむ）＞の最後の＜n＞は黙字で、発音は（おおよそ）＜ドリンケ＞。英語では＜のみの、酒＞の意味で、名詞のばあいも＜drink、名詞＞と同形であるが、オランダ語では相当名詞は＜drank＞と母音変化がある。＜de＞冠詞系列名詞。引用の西善三郎の説明のとおり、単純で具体的な（目にみえる）動作でしめせる基礎語である。

＜アーンテレッケン＞という語について、善三郎は説明して、＜手元へ引きたい＞あるいは＜懐かしむ＞といった意味であるとしている。これは＜aantrekken／アーントレッケ＞のことであろう。オランダ語の他動詞＜aantrekken＞は具体的動作として＜ひっぱる＞、心情的作用として＜ひきつける＞の意味があり、前半部の＜aan＞は分離前綴りとして、文章中で、はなれてしまうこともある。

具体的指示の意味は善三郎の説明のとおりだが、心情的意味はようすがちがうようだ。善三郎は＜ヒト（のココロ）がモノを＜アーンテレッケン＞する＞といているが、（複数の）オランダ語辞書では＜モノがヒト（のココロ）を＜アーンテレッケン＞する＞、となり、逆である。受け身あるいは再帰表現で、形式的な主客が逆になる現象を、大意において、おおざっぱにおなじものとして説明しているのだろう。

他動詞＜aantrekken＞はその意味から察せられるとおり、こくふつうの語彙範囲にある。また形容詞の派生後＜aantrekkelijk（ひきつけるような、魅力的な）＞が実際的には、より基礎的である。（語構成とはちがいが。）にた派生関係をもつのは、たとえば、英語の＜attract－attractive／ひきつける－ひきつけるような／動詞－派生形容詞＞がある。相当関係にあるのは＜on-draw、

ないしdrag>である。

そして当然、期待されるように、一般名詞でとくに臓器の名称があらわれる。第4章で前野良沢が自分のてもちの<ターヘルアナトミア>を玄白にみせていう、くだりがある。

<15> 「御覧なされい！　これが、<ロング>と申し肺でござる。これが<ハルト>と申し心でござる。これは<マージ>と申し胃でござる。これは<ミルト>と申し脾（ひ）でござる。医経（いきょう）に申す、五臓六腑、肺の六葉、両耳肝（じかん）の左三葉、右四葉などの説とは、似ても似ぬこととござる。今日こそ、漢説が正しいか、<オランダ>の絵図が正しいか、試すべき時期でござる」

ここで（<オランダ>はおくとして）

<ロング>－<肺>

<ハルト>－<心>

<マージ>－<胃>

<ミルト>－<脾（ひ）>

の関係が良沢の口からでてくる。関係オランダ語、および英語も記すと、

<ロング／long>－<肺><lung>

<ハルト／hart>－<心><heart>

<マージ／maag>－<胃><stomach>

<ミルト／milt>－<脾（ひ）><spleen>

となる。英語で<milt>は<サカナの白子>、オランダ語<マージ／maag>に対応する英語<maw>は<反芻動物の第4胃>をさす。

と、うえのように整理できるが、たとえばオランダ語の<ロング>が日本語の<肺>（むしろ漢語）に訳せるということは、<肺というものが、存在する、その形状をしっている>ということを前提としている。でないと、日本語にその単語自体が存在しないはずだから。実際は引用にあるように、<オントレートクンディヘ・ターフェレ>の絵図をみて、<これは、<昔から肺といってきたもの>、<心といってきたもの>云々らしい>

と判断している。一応、同定はできるが、ただ、あまりにもこれまで聞いてきた（読んできた）形状とちがうのである。このくだりでは指摘されていないが、漢語としてしっているが、同定できないもの（たとえば三焦）、絵図にハッキリしめされるが、名指しする漢語（日本語？）がないものがあつたはずである。

<医経（いきょう）>とは、漢方学説の古典、「靈樞經」などで、そこでは（うえにあるように）<肺は6個の部分（葉）にわかれている>、<肝臓はおおきく2つにわかれ（両耳肝）、それぞれ3つ、4つの小部分（左三葉、右四葉）からなっている>と説かれる。<オントレートクンディヘ・ターフェレ>の絵図は、そして今日では小学生でいどで常識となっている臓器イメージは、これとはまったく異なる。

前野良沢らは、やがて刑死者の解剖にたちあい、<ターヘルアナトミア>の正しさを確認し、「和漢千載の諸説は、みな取るに足らぬ妄説と定（さだ）まり申した。」という。そして、ほとんど基礎ともいえない、わずかなオランダ語力をもとに、果敢な翻訳作業がはじまった。

われらが玄白先生は、息をきらして、骨か原から馳せきたり、あたらしい医学の言説と、あたらしい医学の図像をたずさえてやってこられる。われらにあたらしい医学のイメージングをつたえようと。

6. 付記

若狭小浜藩医、杉田玄白と杉田玄白記念病院（在小浜市）についてご教示いただいた仁愛女子短期大学、藤原正敏先生；江戸期の本邦諸学の流れをお教えいただいた同、大西新吾先生；<外国語>としての言語教育の特異性について解説いただいた同、内藤徹先生にお礼もうしあげます。

<終り>